

イエズス会聖三木図書館

哲学・神学を中心としてキリスト教思想・文化の収集を目的とする。

宗 正 孝 (イエズス会聖三木図書館館長)

1. 聖三木図書館の理念・目的・目標

(Idea・Purpose・Target system)

聖三木図書館はJR四谷駅のすぐ近くの聖イグナチオ教会の敷地中にある岐部ホールの二階に位置する思想・宗教、特にキリスト教を中心とする専門図書館である。

聖三木図書館の前身は、1949年、敗戦後のすさんだ時代に精神的糧を提供しようとしたカトリックのドイツ人宣教師による聖イグナチオ教会のキリスト教図書室設立に始まる。これが1953年に上智大学内のかまぼこ型校舎に移転し、運営を大学に引き継ぎ、蔵書数を大幅に増やした。その後、故クルムバッハ初代館長が洋書を中心とする聖三木文庫(主として学内での通称)として成長させた。またアルフォンス・デーケン名誉教授は第二代所長として聖三木文庫の発展に尽力し、特に「死生学」関係の蔵書を充実させた。聖三木図書館の名称に載っている聖三木は、キリシタン時代(安土・桃山時代)の日本人殉教者でイエズス会修道士であった青年パウロ三木に因んでいる。

それまで上智大学内の一施設として上智会館二階にあった聖三木図書館は、2007年12月3日に学校法人上智学院から隣接する岐部ホールの宗教法人カトリックイエズス会に管理運営が移された。

その名称および創設の由来が如実に物語るとおり、聖三木図書館の理念・目的・目標は、現在に至るまで揺らぐことなく一貫している。すなわち日本の文化的土壌にキリスト教の思想・文化を紹介し、日本文化の根幹をなす東洋の思想と西洋文化の核心にあるキリスト教思想の間に対話を促すために寄与せんとするものである。その目的のため聖三木図書館ではカトリックを中心に古今のキリスト教思想家の著書および雑誌資料のみならず、キリスト教文学、美術、音楽などの分野でも図書資料の収集を行なっている。さらに「仏教」とくに禅などの東洋思想や「イスラム教」やいわゆる「新興宗教」なども数は少ないが、参考として収集している。これらの図書資料は上智大学の研究者・学生に限らず、学外の利用者にも公開されており、これにより聖三木図書館が追求する異文化間対話という目標は、上智大学とイエズス会の日本社会との対話の一翼を担うことによってよりよく実現すると期待できる。

聖三木図書館の理念は、「ソフィア(叡智)」を標榜する上智大学の根本理念を実現せんとするものである。すなわちグローバル化した世界の中で多元的文化間の対話の重要性が認められつつある現在、キリスト教思想・文化の専門図書館の役割はさらに重要度を増すものと見込まれる。



図1 聖三木図書館入口



図2 イエズス会日本管区本部の入口(千代田区麹町6-5-1)

2. 組織(Organization)

修道会イエズス会司祭である館長の下に同会の修道士1名、契約職員9名、アルバイト学生3名が図書館業務に当たっている。この他に人事と給与の管理、建物全体の管理および会計担当が1名おり、予算決算については宗教法人カトリックイエズス会の財務担当理事が聖三木図書館をも管理している。

キリスト教専門図書館としては単なる資料収集だけではなく、レファレンス・サービスすなわち利用者の資料検索を援助するサービスも重要である。本図書館はこれらの点で、長年の蓄積により契約職員はもとより毎日とはいかないまでもアルバイトの学生(上智大学の神学部の四年生や大学院生)が手伝っているのも、十分とはいえないまでも利用者の要求に答えるだけの技量レベルを保持している。

しかしながら、今後とも専門的知識を有する館員を確保する方途をいかに求めるかが現状のかかえる問題点である。これまでは図書館業務だけではなく、キリスト教の知識にも習熟した契約職員の努力によってきたが、今後ともそのような技量を有する職員を確保していかなければ本図書館の使命を十分遂行することはできない。



図3 閲覧室側から見たカウンター

3. 蔵書構成(Library Catalogue of main collection)

2014年度末における蔵書および所蔵資料数は大体次の通りである。

和書および洋書 約35,400冊

和雑誌 19タイトル



図4 新着雑誌書架

洋雑誌 3タイトル

以上の中で、本図書館がその使命として継続的に収集している図書資料の主なものは次の通りである。

聖書学・神学	3,000冊
哲学・宗教ほか	5,000冊
キリスト教一般書	7,500冊
キリスト教関連芸術・文化	6,400冊
キリスト教関連洋書	4,100冊

これらに加え、さらに本図書館で力を注いでいるキリスト教作家著作のコレクションとして、神学者であり哲学者でもあるアウグスチヌス、トマス・アクイナス、イエズス会創設者のロヨラのイグナチオ、日本に信仰を伝えたフランシスコ・ザビエル、さらにキリシタン関係、またフランス女性思想家シモーヌ・ヴェイユ、ドイツ女流作家ゲルトルート・フォン、ル・フォール、ユダヤ教からキリスト教に改宗したカルメル会修道女としてナチスの手で殉教したエディット・シュタインさらにはイタリアの女性教育者モンテッソーリやJ・H・ニューマンなど、キリスト教神秘思想関係などがある。

その他重要なコレクションとして

明治大正期カトリック図書・「死生学」関係(医学、生命倫理、臨床医学、看護学を含む)・老人問題などもある。また以上に加え日本のキリスト教作家・著述家の著作の収集も重要である。

有吉佐和子、井上ひさし、井上洋治、犬養道子、

遠藤周作、小川国男、加賀乙彦、神谷美恵子、木崎さと子、佐古純一郎、椎名麟三、島尾敏雄、曾野綾子、高橋たか子、田中耕太郎、田中澄江、永井隆、三浦綾子、三浦朱門、三木清、森有正、森禮子、渡辺和子、八木重吉、八代静一、ほかである。



図5 集密書庫には寄贈本や複本を収蔵

また雑誌・新聞資料としては、カトリック雑誌「声」が明治末から揃っており、カトリック新聞も戦前の部分から所蔵している。いずれも版元の出版社でもすでに所蔵していない部分を含んでおり、本図書館の貴重資料である。

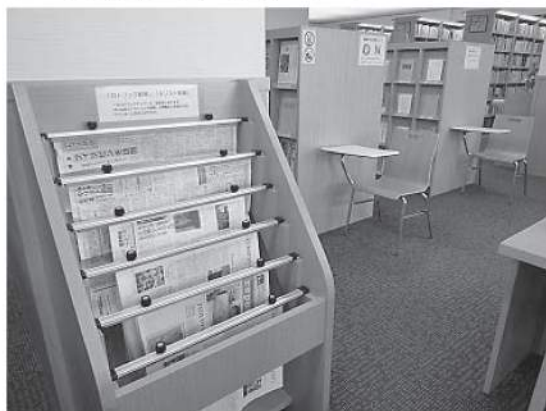


図6 カトリック新聞など新着紙の新聞架

J・H・ニューマン関係図書のコレクションは、その研究者であったL・ワード師のコレクションおよび日本ニューマン協会からの寄贈によって成立したコレクションであり、日本では随一の価値を有する物である。

キリスト教思想・文化に関連する図書資料収集に関して、本図書館は、内外のキリスト教作家の著書は原典を含めて網羅しており、利用者の必要に答えられるよう努めている。他方、利用者の受容から判断すると、近年、洋書部分の利用が減少していることは確かである。英語を楽々と読みこなせる利用者が少なくなっていることに加えて、英語以外の外国語を解する利用者も減少していることが考えられる。これに対応して本図書館では図書予算の制限や場所の小ささもあって、有効な図書資料の収集のためには、やはり利用頻度を考慮して和書中心にせざるを得ない。しかしキリスト教思想・文化の紹介という本図書館の目的に添おうとするなら、洋書(各国語は無理としても、少なくとも英書)も必要である。和書と洋書のふさわしい均衡を再検討する必要があるだろう。キリスト教図書館としては上智大学神学部の図書、さらに上智大学の図書館の八階にはキリスト教文化研究所やキリシタン文庫があり、相互協力により、それぞれの使命をよりよく果たせるのではないかと思う。



図7 閲覧室を見守るマリア像と雑誌架

聖三木図書館に入館してすぐ右側の壁に、毛筆で奉書紙にしたためられた手紙が額に入れて飾ってある。手紙の筆者は文化勲章を受章した作家司馬遼太郎氏である。手紙の宛先は、イエズス会の河野純徳神父であり、河野神父が翻訳した『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(平凡社)を贈った

ことへの司馬氏の礼状である。この『全書簡』には1535年次兄に宛てたものから広東沖の島から発信した「書簡第173」まで、すべてが収まっている。源流をたどる立場の司馬さんが大喜びするほど貴重な資料となる本が昭和60年刊行された。それが河野神父から贈られた『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』だった。

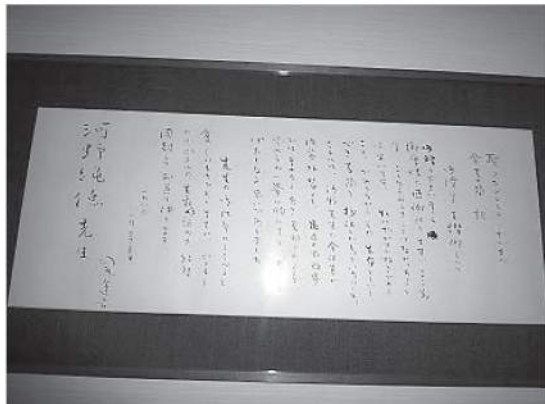


図8 イエズス会河野神父宛の司馬遼太郎氏の手紙

4. 図書館の特色 (Characteristic of the Library)

本図書館が近接する上智大学図書館とは区別された機関として存続する理由は、その特色をなす活動にある。上智大学図書館が主として対象を教職員、学生に限定しているのに対し、本図書館はイエズス会の宣教活動の一環としてまたカトリック思想を日本社会へ発信する使命を持つ。

ただし無差別に利用者を受け入れるのではなく、会員制をとることにより本図書館の理念に賛同する利用者を確保するようにしている。そのために上智大学関係者には教職員・学生にも割引はしても、会費を求める。利用者としては、上智大学の教職員および学生、聴講生、神学部が主催する神学講座、神学講習会受講者、カトリックおよびその他のキリスト教聖職者・修道者・修道女、神学生、また著述家、研究者、医療従事者、ジャーナリスト、また一般社会人や主婦など多岐にわたっている。

これらの中には他機関すなわち出版社や図書館からの紹介で本図書館を訪れる利用者も少なくない。遠隔地からの問い合わせも多くあり、北海道

から沖縄まで、国内各地から本図書館の蔵書・資料について問い合わせがあり、電話での問合せにも応じるサービスをしている。

このように一般公開図書館という特質は、本図書館の本質の一部をなす重要なものであり、宗教法人が有する図書館としても特徴があろう。

5. 活動 (Activity)

開館の予定に関しては、休館カレンダーを4か月に一度発行しており、原則として木曜日と国の祭日は休館、月末は閉館しても館内整理に職員は勤務する。そのほか夏の8月後半、12月の終わり二週間と年始は休みとし、その間は長期貸出を行い、会員の便宜をはかっている。

2014年度の会員数は2,390名である。日常の利用者数は、正式には統計をとっていない。ただ年間利用者は延べ10,000人強と推算される。

近年の傾向として、定年退職後に学習意欲に燃えて図書館を利用する会員が増えている。これは日本社会一般の傾向でもあろうが、本図書館はキリスト教への関心を深めたシニア世代の社会人が利用できる数少ない専門図書館としてその需要に応えていきたい。実際千代田区など公的機関が発行している生涯教育に関わる情報雑誌にも、あるいは首都圏の専門図書館を紹介する一般ガイドブックにも、本図書館は紹介され知名度が高いとされている。



図9 閲覧室(シニア世代の利用者)

なお2010年からは会員相互の連携を目的に、4ページの会報「ゆるし」を年2回7月31日と12月3日に発行している。これには「友の会」会長と副会長が主にかかわり、上智大学の卒業生であるイラストレーターがボランティアで手伝ってくれている。会報は会員全員に郵送あるいは手渡しで配っている。



図10 会報「ゆるし」

蔵書資料の検索は館内では可能であるが、蔵書データの一般公開も課題となっている。蔵書データがインターネット経由で公開できれば、利用者は拡大されることが見込まれるが、まだ現在は準備が完全には整っていない。ホームページの充実、さらにはいうまでもなく蔵書の充実は今後の課題であり、思想・宗教の専門図書館として利用者の期待に応えるものに発展させることは今後の努力目標になるであろう。



図11 単独閲覧用の机(壁の写真はサンチャゴ巡礼路上にある修道院内部)

(そう まさたか)

イエズス会聖三木図書館 哲学・神学を中心としてキリスト教思想・文化の収集を目的とする。
宗 正孝 (イエズス会聖三木図書館館長)

聖三木図書館の由来と歴史的経緯を述べ、特に理念として日本の文化的土壌にキリスト教の思想・文化を紹介し、日本文化の根幹をなす東洋の思想と西洋文化の核心にあるキリスト教思想の間に対話を促すために寄与せんとするものであることを述べる。経営母体として最初は教会の一図書室として始まり、それが上智大学の施設として長い間保たれてきた。2007年12月3日に学校法人上智学院から隣接する岐部ホールの宗教法人カトリックイエズス会に管理運営が移された。上智大学のものだった折には教養課程の補助として資料も収集されたが、イエズス会に移管されてからは、資料も電子化され、特に宗教関連のものを優先的に収集するようになり、その意味で思想・宗教の専門図書館の色彩を帯びることとなった。それはイエズス会がその宗教活動の一環としてこの図書館を位置づけたことにもよる。

キリスト教専門図書館としては単なる資料収集だけではなく、レファレンス・サービスすなわち利用者の資料検索を援助するサービスも重要であり、本図書館はこれらの点で、長年の蓄積により契約職員はもとよりアルバイトの学生も利用者の必要に答えるだけのレベルを保持している。

2010年からは、年2回7月と12月に4ページの会員間の会報「ゆるし」を発行し、会員全員に発送し、特に東京を離れた地方の会員との交流を図っている。